

## 第 14 章 点検・評価

## 第14章 点検・評価

### 【到達目標】

本学は教育研究の内容、組織体制等について効率的な自己点検・評価を行い、大学運営の改善に反映させること、及び自己点検・評価結果を公表し、社会に対する説明責任を果たすため、次のことを目標としている。

- ① 自己点検・評価の充実と公表
- ② 自己点検・評価結果の活用(明らかになった問題点の改善と長所の伸張)
- ③ 外部評価(第三者評価)の活用(明らかになった問題点の改善と長所の伸張)

### (自己点検・評価)

自己点検・評価を恒常的に行うためのシステムの内容とその活動上の有効性

#### 【現状の説明】

本学では、点検並びに評価及びその結果を公表することを学則第2条に規定している。

具体的には、1993年に「自己点検・評価規程」を制定し、自己点検・評価運営委員会を設置し、全学的に取り組んでいる。

当委員会では、1991年度から毎年、自己点検・評価報告書である「京都外国語大学アカデミックレポート」を刊行した。2005年度版からホームページに掲載し、学内外に公表している。

また「京都外国語大学アカデミックレポート」の内容を2005年度から徐々に(財)大学基準協会 大学評価基準・項目や大学基礎データに順応すべく改善を図っている。

2004年度から自己点検・評価並びに認証評価に専門的に対応すべく点検評価調査室を開設した。

この度の認証評価を受けるに当たり、学内において全職員を対象とした説明会を次のとおり開催した。

#### 第1回

実施日 2007年7月23日

- 内容
- ・概要説明 奥川義尚 点検評価調査室長
  - ・資料に基づく実務説明 村岡孝之 点検評価調査室課長補佐
    - (1) (財)大学基準協会 基準項目等について
    - (2) 2004年(平成16年)度 相互評価結果報告書における問題点

#### 第2回

実施日 2007年10月29日

- 内容
- ・はじめに 根上 明事務局長
  - ・講演 講師 工藤 潤氏 (財)大学基準協会 主幹  
テーマ 「大学に求められる自己改革力  
——大学基準協会の大学評価と自己点検・評価——」
  - ・質疑応答
  - ・おわりに 奥川義尚 点検評価調査室室長

・事務連絡 村岡孝之 点検評価調査室課長補佐

(1)点検・評価報告書【試作】について

(2)その他

**自己点検・評価の結果を基礎に、将来の充実に向けた改善・改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性**

【現状の説明】

先の「自己点検・評価を恒常的に行うためのシステムの内容とその活動上の有効性」で述べたとおり、毎年「京都外国語大学アカデミックレポート」を刊行し、自己点検・評価に勤めている。

また、各部署においては、所管の委員会において、年度毎に改善・改革のための重点施策や諮問事項を定め、委員会にて検討を重ね、結果を学長へ具申し、本学の将来計画に役立てている。

**(自己点検・評価に対する学外者による検証)**

**自己点検・評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性**

【現状の説明】

自己点検・評価の結果に対し、客観性・妥当性を確保するために、「京都外国語大学アカデミックレポート」を発行し、大学内外に配布している。配布先は、冊子(CD-ROM版)を日本私立大学協会に加盟している大学ならびに京都地区の全大学に送付している。また、発行と同時にホームページに掲載し、広く社会に公開し、意見を求めている。

**(大学に対する社会的評価等)**

**自大学の特色や「活力」の検証状況**

【現状の説明】

文部科学省が各大学の積極的な教育改革の取組のサポートとして実施している「特色ある大学教育支援プログラム(特色G P、2003～2007年度)」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代G P、2004～2007年度)」、「質の高い大学教育推進プログラム(教育G P、2008年度～)」に本学も申請し、現在までに3つの取組が採択されている。

2004年度には「官学連携による観光振興—多言語で京都を発信する—」のテーマで現代G Pに、2006年度には「ティームティーチングによる二言語同時学習—外国語教育の新たな教授形態—」で特色G Pに、2008年度には「多文化共生時代の協働による日本語教員養成—体験活動での教育効果を高めるWEBダイアリーの活用—」で教育G Pに選定され、競争的資金を得て取組を行っている。

1つ目の現代G Pの取組では、国際文化観光都市・京都の観光振興の分野において本学の教育・研究活動の目的を踏まえ、「文化の翻訳・翻案」という新たなコンセプトを用いて多言語で京都を表象(新たな京都の創造)することで、地域への貢献を図っている。現在、チューター(外国人教員)による指導のもとに、学生が個人またはグループで京都の文化

と伝統を比較文化の視点から研究し、各々の研究成果が発信されるまでの過程をデジタルポートフォリオとしてまとめ、本学の専攻言語による多言語データベースとして構築し、「LEARNING ABOUT KYOTO 京都研究プロジェクト」を公開している。

2つ目の特色GPでは、英語を基軸とした二言語同時学習を目指す先駆的な教育を展開している。二言語を対照言語学的アプローチにより比較対照し、両言語の発音、語彙、文法、表現、意味における共通点、類似点、相違点を明確にすることで、学習者は個々の言語の特性をより深く明確に理解することが出来る。この二言語同時学習を実践するために、二言語の融合型CALL教材を用いて練習量を強化し、理解を定着させる。また、比較文化論的アプローチにより言語的側面だけでなく、文化面、社会面なども比較対照することにより、それぞれの言語圏の事情をも理解させる。

3つ目の教育GPでは、2000年度から外国語学部全体に広げている日本語教員養成プログラムにおいて、多文化共生時代に対応できる「協働と内省により得た知見を再構築する能力」を備えた日本語教師の育成をめざす。この取組では、地域での日本語教育支援ボランティア、海外でのインターンシップ、国内外での教壇実習等の体験活動において、学生の「学び」と「実践」を有機的に統合する教育を展開する。具体的に、体験後に意識の変化や自己反省、前日からの成長等を「WEBダイアリー」に記録し、そのダイアリーの内容に基づいて、教員からタイムリーな直接指導や学生間の対話を促進する。また、この仕組みを支援する効果的な手法として、リアルタイムで情報交換が可能なコミュニティ(SNS)を構築し、構成メンバーの支援ネットワークを創出する。

## 文部科学省からの指摘事項及び大学基準協会からの勧告などに対する対応

### 【現状の説明】

文部科学省からの過去5年(2003年4月1日から2008年3月31日)における留意事項は、次のとおりである。

《2004年11月30日付 大学院研究科の専攻の設置認可時》

留意事項 外国語学部フランス語学科、イタリア語学科、京都外国語短期大学英語科第二部の定員超過の是正に努めること。

履行状況 フランス語学科の定員超過率は、2002年度1.35、2003年度1.26、2004年度1.36であったが、2005年度1.20、2006年度1.15と是正に努めた。

イタリア語学科の定員超過率は、2004年度(設置年度)1.36、2005年度1.40であったが、2006年度1.22と是正に努めた。

京都外国語短期大学英語科第二部の定員超過率は、2004年度1.35であったが、2005年度1.14、2006年度1.22と是正に努めた。

《2006年7月28日付 短期大学の収容定員の増加に係る学則変更認可時》

留意事項 外国語学部イタリア語学科の定員超過の是正に努めること。

履行状況 イタリア語学科の定員超過率は、2004年度(設置年度)1.36、2005年度1.40であったが、2006年度1.22、2007年度1.20と是正に努めた。

大学基準協会からの提言は、2004年（平成16年）度に相互評価の評価結果において、勧告を1件、助言を30件受けた。

その勧告の内容は、次のとおりであった。

指摘のあった基準項目：教員組織

指摘事項：英米語学科の専任教員一人あたりの学生数は、99名を超えており、あまりにも過大である。

大学の中核的な学科であるだけに、適切な人的体制を整備されたい。

評価後の改善状況

《改善目標》英米語学科の専任教員一人あたりの学生数を60名以内としたい。

《改善計画》2005年度 教員人事委員会で、教養教育等の所属替えも含め教員組織の配置替えを検討する。

2006年度 教授会で教員組織替えを機関決定する。

2007年度 完成年度勧告で指摘されている改善を満たす教員組織をスタートさせる。

《改善結果》人事委員会・教授会にて教員組織について、新たな見直しが行われ、教養教育等・教職課程等の資格課程担当の教員を学部内（学科毎）に配置した。

改善状況を示す具体的な根拠・データ等

2003年5月1日現在

(名)

学 科 等	学生数	専任教員	教員1人あたりの学生数
英米語学科	2,183	22	99.2
イスパニア語学科	396	10	39.6
フランス語学科	308	8	38.5
ドイツ語学科	272	8	34.0
ブラジルポルトガル語学科	283	9	31.4
中国語学科	396	10	39.6
日本語学科	319	9	35.4
教養教育等	—	20	—
教職・司書・博物館学芸員課程	—	4	—
計	4,157	100	41.6

2008年5月1日現在

(名)

学 科 等	学生数	専任教員	教員1人あたりの学生数
英米語学科	2,200	46	47.8
スペイン（イスパニア）語学科	371	10	37.1
フランス語学科	298	11	27.1
ドイツ語学科	260	10	26.0
ブラジルポルトガル語学科	272	10	27.2
中国語学科	399	11	36.3
日本語学科	251	9	27.9
イタリア語学科	284	8	35.5
計	4,425	115	38.5

助言事項に対して、ご周知のとおり（財）大学基準協会においては、改善・改革に当たってのアドバイスとしての性格をもつもので、直ちに何らかの対応をする必要はないとしているが、本学では、その結果を真摯に受け止め、すべての事項について改善する方向で点検・評価運営委員会ならびに執行部会議などで検討を重ね、当該部署と方策を練り、取り組みがなされた、しかしまだ改善途中の事項もあるので、今後も改善に取り組んでいく。

#### 【点検・評価】【改善の方策】

点検・評価における到達目標についての点検・評価ならびに点検・評価の結果、明らかになった改善の方策は、次のとおりである。

①「京都外国語大学アカデミックレポート」の記載内容を検討し、年々充実させている。公表については、ホームページで公開しているほか、関係機関に送付している。

点検評価調査室が開設され、学内での自己点検・評価に対する認識が一層強まったことは、大変有効性が認められる。

自己点検・評価に対する意識は、学内においては教員ならびに職員に定着しているので、この状態を維持していく。

②「京都外国語大学アカデミックレポート」には、（財）大学基準協会で作られている基礎データと同じ内容のデータに加え、本学独自のデータも掲載されている。これらのデータを毎年更新しているため、本学における数量的な推移を基に経年比較ができ、将来に向けた改善・改革を行うための資料として活用されている。

本学の将来の充実に向けた改善・改革を行うためのPDCAサイクルが出来上がっている。今後もこのシステムを続け、改善・改革を推し進める。

③「京都外国語大学アカデミックレポート」のデータ項目等を（財）大学基準協会 大学評価基準・項目や大学基礎データに順応すべく変更したことは、認証評価を受ける時に日頃の点検・評価がスムーズにそのまま移行できるようにしたものである。

現代GPは、本学の国際交流協定大学や諸外国国際文化交流団体等に外部評価を依頼し、その有効性について検証を行った。補助期間は2006年度で終了したが、大学の特色ある教育研究として、本学が経費負担して取組を継続している。この取組は、2007年度に私立大学等経常費補助金の私立大学教育研究高度化推進特別補助に採択され、一部経費の補助を受けながら運営している。また、特色GPにおいては、2008年度に実地調査を受け、「当初の計画どおり実施され、特に問題ない」との評価を受けた。補助期間は2008年度に終了するが、現代GPと同様に、大学で経費負担して継続する予定である。

文部科学省からの留意事項は、改善された。

また、（財）大学基準協会から受けた勧告事項については、改善がなされた。助言事項についても全ての事項を改善する方向で取り組みがなされた。しかし、助言を受けた事項の中でまだ改善途中の事項もあるので、今後も改善に取り組んでいく。